

目 次

序章.....	1
1. 文の種類としての疑問文.....	1
1.1 文の4分類.....	1
1.2 日本語の疑問文規定の難しさ.....	3
1.2.1 「カ」.....	4
1.2.2 「ノ」.....	6
1.2.3 「ダロウ」「シヨウ」.....	7
1.2.4 要素の連携.....	8
2. 疑問表現研究の限界.....	10
2.1 話し手を捨象する傾向.....	11
2.2 疑いの文への偏り.....	12
3. 本書の立場.....	13
4. 本書の目的.....	17
5. 本書の構成.....	17
6. 本書の特徴.....	18
6.1 話し手の物腰.....	18
6.2 史的観点.....	20
第1章 疑問文・疑問表現研究史.....	21
1. 本章の目的・構成.....	21
2. 原理的研究.....	22
2.1 表現意図への注目.....	22
2.2 陳述論と疑問表現.....	26
2.3 陳述論の影響(1) 山口堯二の疑問表現研究.....	27
2.4 陳述論の影響(2) モダリティ論における疑問表現の扱い.....	28
2.5 述体としての疑問文研究.....	31
2.6 近年の動向.....	33

2.7	今後の課題	34
3.	構成要素研究	35
3.1	連体形終止	36
3.1.1	疑問詞疑問文と連体形終止	36
3.1.2	終止形終止の疑問詞疑問文	37
3.1.3	連体形終止の疑問用法	39
3.2	ム系述語	41
3.2.1	疑問文とム系述語	41
3.2.2	非疑問文との境界	42
3.3	係助詞「ヤ」「カ」	43
3.3.1	「ヤ」と「カ」の比較	43
3.3.2	係助詞の下位分類	44
3.3.3	疑問用法の位置づけと変化	45
3.4	「ノ」	46
3.4.1	「ノ」が参加する疑問文の表現上の性格	46
3.4.2	「ノ」のはたらき	47
3.5	終助詞「カ」	48
3.5.1	質問文における「カ」の不自然さ	48
3.5.2	「カ」は疑問の助詞か	48
4.	文型の研究	49
4.1	通時的研究	50
4.2	上代・中古	51
4.3	中世	52
4.4	近世	53
4.5	近代・現代	55
5.	今後の課題	56
第2章 疑問文の分類		57
1.	相手に答えを求める表現	57
2.	先行研究	58
2.1	仁田 1991a	58

2.2	山口 1990	59
3.	本章の目的・方法・構成	60
3.1	目的	60
3.2	方法	61
3.3	構成	62
4.	言語的反応の観点による疑問文の分類	62
4.1	要求と誘発	62
4.2	解答と応諾反応	64
4.3	説明誘発	66
4.4	同意表明期待	67
4.5	全体像	68
5.	各タイプの疑問文の文型	69
6.	言語的反応を期待する非疑問文	77
6.1	同意表明を期待する非疑問文	78
6.2	応諾反応を期待する非疑問文	79
7.	疑問文規定の二段階性	80
第3章 ノ有り疑問文の構造		83
1.	解答要求疑問文における「ノ」の有無	83
2.	本章の目的・対象・構成	87
3.	Yes/No ノ有り疑問文の表現の色合い	88
4.	Yes/No ノ有り疑問文の一般構造	90
5.	Yes/No ノ有り疑問文の運用	92
5.1	ノ有り疑問文とノ無し疑問文の違いの程度	92
5.2	スコープの「ノ」	93
6.	平叙ノダ文との関係	94
7.	承認抑止述法	96
7.1	準体句構成用法と承認抑止述法	96
7.2	疑問文における「ノ」のはたらき	99
8.	連体形終止と疑問文の「ノ」	101

第4章 ノ無し疑問文と代弁的質問	103
1. ノ有り疑問文とノ無し疑問文の使い分け.....	103
2. 先行研究.....	104
3. 本章の目的・構成・調査対象.....	105
4. 調査結果.....	106
5. ノ無し疑問文が好んで用いられる質問.....	107
5.1 (A) ケースβに特有の質問.....	108
5.1.1 質問場面.....	108
5.1.2 質問内容.....	110
5.1.3 代弁的質問.....	112
5.2 (B) ケースβが多い質問.....	113
5.3 分析のまとめ.....	115
6. ノ無し疑問文による代弁性の維持.....	116
6.1 判定要求疑問文の代弁性.....	116
6.2 代弁性の維持.....	117
7. 本章の見方の有効性.....	118
第5章 Wh 疑問文における「ノ」の有無	123
1. Wh 疑問文と「ノ」の有無.....	123
2. 本章の目的・方法・構成.....	126
3. 調査結果.....	127
4. (α) ノ有り疑問文の方が安定するケース.....	129
4.1 4つの条件.....	129
4.2 了解内容の一部あるいは関係項目が不明な疑問文.....	136
5. (β) ノ無し疑問文の方が自然なケース.....	140
5.1 ノ無し疑問文が求められる場面.....	140
5.2 相手の意向・認識を引き出す不明項特定要求疑問文.....	141
6. (γ) どちらも使えるが意味が異なるケース.....	143
6.1 違いのあり方.....	143
6.2 相手の内心をたずねる不明項特定要求疑問文.....	145

7. 解答要求疑問文の構造.....	147
第6章 ショウカ疑問文の異質性.....	151
1. 疑問文の文末「カ」.....	151
2. 本章の目的・構成.....	153
3. 非疑問の文末「カ」の文.....	154
3.1 (A) 断言放棄.....	155
3.2 (B) 断言躊躇.....	156
4. ショウカ疑問文の異質性.....	159
4.1 疑問の文末「カ」の文.....	159
4.2 えらそうな男性キャラクタとのむすびつき.....	162
4.3 疑問文における文末「カ」の必須性.....	164
5. ショウカ疑問文の運用.....	167
5.1 引き込み型誘い.....	167
5.2 「どこに行きましょう？」.....	168
6. 疑いと問いの関係.....	169
第7章 ショウカ疑問文の近代語性.....	173
1. 応諾反応要求疑問文の文型.....	173
2. 本章の目的・構成.....	176
3. 中古語の意志形述語疑問文.....	177
3.1 調査の方法と対象.....	177
3.2 文型.....	179
3.3 「～ヤ…ム」「～ヤ…マシ」.....	182
3.3.1 非対人的表現.....	183
3.3.2 対人的表現.....	184
3.4 「…ムヤ」.....	185
3.4.1 行為主体が話し手の場合.....	187
3.4.2 行為主体が相手の場合.....	188
3.5 中古語と現代語の比較.....	189

4.	中世末期の意志形述語疑問文	192
4.1	調査の方法と対象	192
4.2	意志をめぐる Yes/No 疑問文の表現機能	194
4.2.1	「-ウカ」「-ウズルカ」	194
4.2.2	「-スルカ」	197
4.3	表現機能の拡大	198
5.	シヨウカ疑問文の近代語性	199
終章		201
1.	本書の内容	201
1.1	「問い」概念の精密化	201
1.2	解答要求疑問文における「ノ」の有無と「問い」のあり方の関係把握	202
1.3	シヨウカ疑問文の異質性把握	202
2.	現代日本語の疑問文規定	203
3.	展望と課題	205
3.1	話し言葉の文法研究に向けて	205
3.2	文の種類への意識	207
附章 疑問文と終助詞		209
1.	疑問文に付加する終助詞	209
2.	本章の目的・方法・構成	210
2.1	目的	210
2.2	「ネ」と「ネエ」、「ナ」と「ナァ」の区別	211
2.3	構成	212
3.	終助詞付加の可否	212
4.	終助詞付加による表現機能の変化	215
4.1	グループ (I) — 「ネ」と「ネエ」 —	216
4.2	グループ (II-1) — 〈ね〉(「ネ」「ネエ」と〈な〉(「ナ」「ナァ」) —	220

4.3 グループ(Ⅱ-2) —〈ね〉(「ネ」「ネエ」)と〈な〉(「ナ」「ナァ」)—	223
5. 終助詞付加に見る疑問文の異質性	225
6. まとめ	226
初出	229
あとがき	231
出典・調査資料	233
参考文献	239
索引	249

序章

1. 文の種類としての疑問文

1.1 文の4分類

疑問文は平叙文・命令文・感嘆文と並ぶ、いわゆる文の4分類のひとつである。この4分類は、文を話し手の表現意図に応じて種類分けしたものであり、それぞれ平叙、疑問、命令、感嘆という表現意図に対応する。後述のように文を発する話し手の表現意図は実際にはこの4種以外にも広がるものの、欧米言語においてはこの4種が文の形の違いに対応するため、4分類が一定の意味を持つ¹ (表1)。

表1 英語における文の4分類

	表現意図	文の形	
平叙文	平叙	SVの語順	ex. He speaks slowly.
疑問文	疑問	VSの語順(倒置)	ex. Does he speak slowly?
命令文	命令	Sなし	ex. Speak slowly.
感嘆文	感嘆	How/What+SV	ex. How slowly he speaks.

表1に示すように、英語の平叙文はSVの語順をとるのに対し、疑問文では倒置が起り、VSの語順となる(実際には、倒置されたVはDoやDidなどに置き換えられる。Be動詞や法助動詞、完了のhaveの場合のみ、純粹に倒置により疑問文が構成される)。また、命令文には典型的には主語(S)

1 英語ではこの4種に祈願文(例: May you succeed.)を加えて5分類とする場合もある(長谷川2015)が、ここでは日本語学への影響が大きい4分類を取り上げる。

第1章

疑問文・疑問表現研究史

1. 本章の目的・構成

本章は、次章以降の議論の前提として、これまで日本語学において疑問文や疑問表現に関する研究がどのように行われ、何が明らかにされてきたかについて整理して示すことを目的とする。

本章の構成は以下の通りである。まず、2節では、疑問文とは何かという原理的な問いが日本語学においてはどのような動機で生まれ、どのような説明がなされてきたかを見る（原理的研究）。3節では、疑問文を構成する文法形式に着目し、各形式が疑問文の中でどのようなにはたしているかについて考察した研究をまとめる（構成要素の研究）。そして4節では、ある時代、ある作品などに範囲を定め、その中に出現する疑問文型を網羅的に洗い出したり、複数の文型が何を基準に使い分けられているかを整理したりするタイプの研究をまとめる（文型の研究）。もちろん、ひとつひとつの研究は構成要素や文型の分析を通して疑問文とは何かを考察するものであり、どれかひとつのタイプだけに属するものではないが、便宜上このように分類する。

なお、後述のように、日本語文法研究において疑問文は文の種類としてよりも、表現の種類として注目され、研究が行われてきた。そのような研究では考察対象を「疑問表現」として扱うことから、以下では疑問文をめぐる先行研究の全体を疑問文・疑問表現研究と呼ぶ。

第2章

疑問文の分類

1. 相手に答えを求める表現

疑問文について多角的に考えようとするならば、考えるべきことの出発点であり最大のものは、疑問文であることと相手に答えを求める表現であることとの関係という問題である。疑問文は本質的に疑問感情の表明であり、それに相手を巻き込んで疑問を解消してもらおうとするのが答えを求めるということなのだから、疑問文と答えを求めることとの間に密接な関係があることは疑いようがない。

しかし、両者の関係を精密に論じようとするれば、それ以前に次の2点において答えを求める表現の多様性を確認しておく必要があることに気づく。

A. 疑問文がすべての場合に相手に答えをたずねる質問の表現であるわけではない。自問の疑問文を厳密な意味で質問と言えないだけでなく、相手を目の前にして言う疑問文の中にも質問とは言いにくいものがある。

- (1) 「昨日のサッカー、どっちが勝ったんだろう？」
- (2) 「昨日のサッカー、どっちが勝ったのかな？」
- (3) 「昨日のサッカー、どっちが勝ったんですか？」

(1) (2) の疑問文は、人前で言えば、親切な相手から「日本が勝ったよ」という答えを引き出すことがあるが、(3) のような質問らしい疑問文とは、表現の種類として一線を画すように思われる。疑問文が相手から答えを引き出

第3章

ノ有り疑問文の構造

1. 解答要求疑問文における「ノ」の有無

本章から5章では、多様に広がる疑問文の中で最も典型的な疑問文と言える解答要求疑問文(不明項特定要求疑問文および判定要求疑問文)を考察の対象とする。解答要求という言語行為と、このタイプの疑問文の内容面がどのようにむすびつくかを考察する手がかりとして、助詞「ノ」の有無に着目する。

「ノ」は疑問文を構成する文末形式のひとつである。「ノ」の有無に着目すれば、疑問文には「～の?」「～のか?」「～のですか?」「～のでしょうか?」のように「ノ」が文末を構成する疑問文(以下、「ノ有り疑問文」と呼ぶ)と「～φ?」「～か?」「～ですか?」「～でしょうか?」のように「ノ」が用いられない疑問文(以下、「ノ無し疑問文」と呼ぶ)がある。

- (1) a. 「もうご飯食べたの?」
b. 「もうご飯食べた?」
- (2) a. 「お昼ご飯、何食べたの?」
b. 「お昼ご飯、何食べた?」

「ノ」の有無による形式的対立は解答要求疑問文に特徴的な現象である。同じ言語的反応を要求する疑問文であっても応諾反応要求疑問文には「ノ」の有無による形式的対立が存在しない。

第4章

ノ無し疑問文と代弁的質問

1. ノ有り疑問文とノ無し疑問文の使い分け

前章冒頭で示した通り、現代日本語の疑問文は文末に助詞「ノ」が参加するか否かによってノ有り疑問文とノ無し疑問文に二分することができる。

ノ有り疑問文 「もうご飯食べたの?」「もうご飯食べたんですか?」

ノ無し疑問文 「もうご飯食べた?」「もうご飯食べましたか?」

そして、これらノ有り疑問文とノ無し疑問文の使い分けという観点から見れば、Yes/No 疑問文による解答要求 (= 判定要求) の場面には次の3つのケースが想定される。

ケースα: ノ有り疑問文が好んで用いられる (ノ無し疑問文は不自然である)

(1) (行きの飛行時間は帰りの飛行時間より短いと聞いて)

- a. 「追い風が吹くんですか?」
- b. #「追い風が吹きますか?」

ケースβ: ノ無し疑問文が好んで用いられる (ノ有り疑問文は不自然である)

(2) (待ち合わせに遅れて来た人が)

- a. #「ごめん、待ったの?」
- b. 「ごめん、待った?」

ケースγ: ノ有り疑問文もノ無し疑問文も使える

(3) (キャンパスですれ違った友人に)

第5章

Wh 疑問文における「ノ」の有無

1. Wh 疑問文と「ノ」の有無

現代日本語の疑問文の文末形式は多様であるが、助詞「ノ」の有無に注目すれば、疑問文はノ有り疑問文とノ無し疑問文に二分することが可能である。その意味の違いに注目すると、前章までで見た通り、判定要求疑問文（Yes/No 疑問文）においては違いがほとんど感じられない場合（(1)）から決定的に異なるためにどちらか一方しか使えない場合（(2) (3)）まで幅広いのに対して、同じ解答要求疑問文であっても不明項特定要求疑問文（Wh 疑問文）においては両者の差があまり感じられない場合が多い（(4) (5) (6)）。

- (1) （午後1時にキャンパスですれ違った友人に）
 - a. 「もうご飯食べたの？」
 - b. 「もうご飯食べた？」
- (2) （松葉づえをつく人に）
 - a. 「骨折したんですか？」
 - b. #「骨折しましたか？」
- (3) （待ち合わせに遅れて来た人が）
 - a. #「ごめんね、待ったの？」
 - b. 「ごめんね、待った？」
- (4) （帰宅した夫に対して、妻が）
 - a. 「お昼ご飯、何食べたの？」
 - b. 「お昼ご飯、何食べた？」

第6章

シヨウカ疑問文の異質性

1. 疑問文の文末「カ」

現代日本語の終助詞「カ」は疑問の助詞と呼ばれる一方で、疑問文の最も典型的な姿である質問文にとって不可欠な要素ではない。たとえば、文末に「カ」を持つ(1a)と「カ」を持たない(1b)の間に質問文としての意味や機能に差は認められない。

- (1) a. 「もうご飯食べましたか？」
 b. 「もうご飯食べました？」

また、普通体の場合には「カ」を持たない質問文の方が安定的に用いられるという事実も既に多くの研究において指摘されている。

- (2) a. 「もうご飯食べたか？」
 b. 「もうご飯食べた？」

質問文として見ると、文末に「カ」を持つ(2a)は男性話者のぞんざいな話し方としてしか許されないのに対し、文末に「カ」を持たない(2b)は特定のキャラクタとむすびつくことなく、広く用いることができる¹。

1 ここていう「キャラクタ」とは定延 2011 が挙げるキャラクタとことばのむすびつき方のうち「発話キャラクタ」に当たるものである。すなわち、ことばが「そのことばを発する話し手のキャラクタをも暗に示す」(p. 110) というむすびつき方である。

第7章

シヨウカ疑問文の近代語性

1. 応諾反応要求疑問文の文型

2章で述べた通り、Yes/No 疑問文による質問は、求める言語的反応の内実に応じて判定要求疑問文と応諾反応要求疑問文とに分かれる。このうち、応諾反応要求疑問文は話し手の行為実現意向に対する相手の意向を問うものである。応諾反応要求疑問文を実現する文型には「シヨウカ」「スルカ」「シナイカ」の3種がある。細かく見れば、これら3種の疑問文が実現する応諾反応要求の表現は、重なりつつそれぞれに異なる。

たとえば、シヨウカ疑問文は次のような対人的表現¹に用いられるが、こ

1 疑問文の対人的表現機能は場面状況や相手との関係の中で定まるものであり、厳密には外延を特定できない。日本語記述文法研究会編 2003 は「「しようか」の対話的な用法としては、申し出、提案、勧誘、促しの4つの用法がある」(p. 43)とする。他にも仁田 1991b・安達 1995・宮崎 2009 を参考に、本章では a～j を挙げる。分類基準は以下の通りである。

行為主体が1人称：非質問…a. 意志表明

質問で相手の受益を前提とする…b. 申し出

質問で相手の受益を前提としない…c. 相談

行為主体が1人称複数：実現の予定がある…d. 行為の促し

実現の予定がなく、他の選択肢を意識していない…e. グループ型誘い

実現の予定がなく、他の選択肢を意識する…f. 提案

行為主体が2人称：話し手の受益を前提とする…g. 行為の誘導／h. 依頼

話し手の受益を前提とせず、聞き手のみが行う行為について実現意志を問う…i. 勧め

話し手の受益を前提とせず、話し手自身も行おうとしている行為について実現意志を問う…j. 引き込み型誘い

勧めと誘いのこのような区別は小田 2015 (p. 222) に従うものである。また、安達 1995 に

終章

1. 本書の内容

日本語では疑問文という道具を用いて、どのようなコミュニケーションをとることが可能か。本書はこのような観点から、現代日本語の疑問文について論じてきた。その内容を振り返れば、以下の3点に集約される。

1.1 「問い」概念の精密化

本書2章では、先行研究でイメージの統一がなされないまま疑問表現の説明に用いられてきた「問い」概念の精密化を図り、どのような言語的反応をどのようにして引き出すかという観点から、現代日本語の疑問文を9種に分類した。

このうち、質問文については、Yes/No 疑問文による質問表現を言語的反応の内実の違いに基づいて判定要求疑問文と応諾反応要求疑問文に分け、前者を Wh 疑問文による質問表現である不明項特定要求疑問文とともに解答要求疑問文として一括することにより、質問表現に解答要求疑問文と応諾反応要求疑問文という異質な2種があることを論じた。

一方、非質問文については、解答要求の度合いが弱いという従来の見方ではなく、要求／誘発という言語的反応の引き出し方の相違と見ることを提案した。また、9種の疑問文の各タイプを担う疑問文型を網羅的に挙げ、疑問文の言語行為的側面すなわち「問い」としてのあり方と疑問文型との間にゆるやかな対応関係が存在することを明らかにした。これにより、疑問文の言語行為的側面について、相手に疑問感情を見せれば答えを要求していること

附章

疑問文と終助詞

1. 疑問文に付加する終助詞

それ自身が疑問の意味を持つと言える「カ」を除くと、疑問文末に付く終助詞には「ネ」「ナ」「ヨ」がある。このうち「ナ」は、助詞「カ」に接続した「～かな」の形で疑問を自問風に表明するという使い方が目立つ。

- (1) 「最近連絡が来ない鳥取のおじさん、元気なのかな？」

ここで「自問の文型」と言わず「自問風に表明する」と言うのは、(1)の文が実際に自問表現に用いられるだけでなく、自分の疑問を人に聞かせる表現としても用いられることがあり、その結果「それが、病氣らしいのよ」などと返事を引き出すことまであるためである。

また、「ナ」ではなく「ネ」が付いた疑問文も同様に自問風の疑問表明の文となる。

- (2) 「最近連絡が来ない鳥取のおじさん、元気なのかね？」

このような「かな」と「かね」の意味の共通性に言及した先行研究には熊野 1999 や三宅 2011 がある¹。どちらも現代共通語において「かな」は普通

1 この「かな＝かね」説の理論的前提には、田窪・金水 1996 が述べる「『な』と『ね』はほとんど同じ機能を持つ助詞である」(p. 71、注9)という考え方がありようである。指示詞や終助詞といった言語形式の意味を言語使用から切り離して説明する田窪・金水 1996 にお